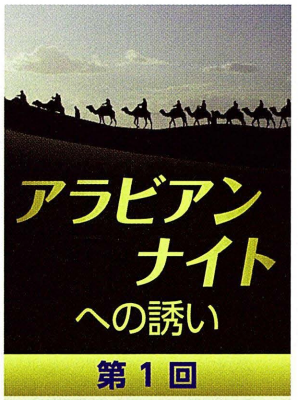
みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「パリのアラブ人」：≪アラジン≫を伝えた人 (アラビアンナイトへの誘い, 1)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5572



「パリのアラブ人」——《アラジン》を伝えた人

夢と不思議が錯綜するアラビアンナイトの世界を旅してみましょう。第一回は「パリのアラブ人」。「アラジン」を伝えたのはアラブ世界のキリスト教徒でした。十八世紀の出来事です。

文・写真
西尾 哲夫
text & photo by
Nishio Tetsuo

京都大学大学院文学研究科博士課程修了。文学博士。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、同助教授を経て現職。現在、人間文化研究機構・国立民族学博物館副館長／教授、総合研究大学院大学教授

……一七〇九年六月一日。聖体の祝日にディヤーブが滞在先の窓から外を見ていると、ノートルダム寺院を出発した聖体行列が目に入った。驚いたことに、天蓋にかかっている深紅のサテン地には真っ白い文字でアラビア文字が刺繍されていた。「アッラーのほかに神なく、ムハンマドはその預言者なり」。ディヤーブが関係筋にこの件を伝えると、サテン地はすぐに外されて焼却された。彼によると、このサテン地は四十年も前から聖体行列に使われていたらしい……

（アントワーヌ・ガラン『日誌』より）

ディヤーブはシリア出身のマロン派（東方キリスト典礼教会の一派）修道僧。ちょうどパリに滞在中でした。この話は、アラビアンナイトを初めてヨーロッパに翻訳紹介したフランス人東洋学者アントワーヌ・ガラン（一六四六～一七一五）の『日誌』に記されています。

アラビアンナイト（千一夜、千夜一夜）と聞いてだれもが思い浮かべる《アラジン》《アリババ》などの話をガランに伝えたのは、このディヤーブだったようです。どちらもアラビア語による原典が見つかっていないため、《アラジン》と《アリババ》が初めて語られたのは十八世紀のパリだったということになるのでしょう。

ガランが翻訳に使ったのは十五、六世紀ころに作られたと思われるアラビア語の写本三巻でした。この写本はパリのフランス国立図書館が所蔵しており、ガラン写本の名でよばれています。今では世界文学として誰もが知るアラビアンナイトは、もとをたどればフランスにあるガラン写本が母体となっているのです。

ガランは外交使節団の一員となって中東に渡り、書店をめぐってはアラビア語やペルシア語などの写本を買い求めたのですが、このころのガランは『千一夜』（アラビア語で『アルフ・ライラ・ワ・ライラ（千一夜）』）という物語集があることを知らなかったようです。

実はこのころ、ガラン写本は彼のすぐそばにありました。一六八〇年にはトリポリ（レバノン）在住のキリスト教徒がガラン写本を所持していたことがわかったのです。ガランはその少し前にトリポリを訪問しているのですが、ガラン写本は私家版としてムスリムやキリスト教徒の家庭内で大切に伝えられていたらしく、図書館や書店には出回っていなかったようです。

さて、フランスに帰国したガランは、別ルートから《シンドバッド航海記》の写本を手に入れてフランス語に翻訳しました。ところが、『シンドバッド航海記』は『千一夜』というさらに長大な物語集の一部らしいという情報を耳にしたため、中東時代に築いた人脈をたどって『千一夜』の写本を手に入れました。一七〇一年十月十三日の『日誌』には次のように記されています。

……三、四日前、パリ在住のアレッポ（シリア）の友人から手紙が届きました。自国からアラビア語の写本が到着したというのです。手に入れてくれるよう、私が頼んでいた本です。その本は三巻から成っていて……『千一夜』という題名がついています……友人によると「シリアで夜の間によみあげてきた物語を集めたもの」だそうです……

パリのモスク

こうしてガランのもとにやってきた『千一夜』写本こそ、一六八〇年にキリスト教徒の家庭で所蔵されていた三巻本（ガラン写本）だったのです。

ところがガランの手元に届いた三巻本写本には、《アラジン》も《アリババ》も入っていませんでした。それだけではなく、《シンドバッド航海記》も入っていなかったのです。《シンドバッド航海記》を『千一夜』の一部として紹介したのは、ガランの一存によるものだったようです。

シリアで伝えられてきたガラン写本全三巻に入っていたのは、二百八十一夜分の物語でした。千一夜分の話が記された現在のアラビアンナイトが成立するには、七百夜分を超える分量の話が新たに必要になるわけです。おりしも十七世紀ころのエジプトでは、民間で伝えられてきたと思われる物語が次々と採録され、新しいアラビアンナイトが編まれていました。やがてヨーロッパとアラブの交錯した関係の中から、現在のアラビアンナイトが誕生することになります。

ガランとディヤーブの出逢いに始まったフランスとアラビアンナイトの関係は、今も続いています。ガラン写本には入っていなかった《アラジン》のアラビア語写本を捏造したのも、千一夜分の物語を含む偽写本を造ったのも、パリにやって来たアラブ人でした。そしてエジプトで生まれ育ったマルドリュスは、日本をはじめとして世界中に多くの愛読者がいる翻訳版（『マルドリュス版千一夜物語』）をフランス語で著しました。1730年創業のパリで一番古い菓子屋のショーウィンドーを飾るのは、その名も《アリババ》という名のケーキです。

パリにはアラブ世界からの移民も多く、立派なモスクはもちろん、あちこちでアラブ系のレストランを見かけます。アラブ関係の専門古書店も少なくありません。ガランが翻訳したアラビアンナイト全十二巻の初版本を探すうちに懇意になった店主は、チュニジアの出身でした。若き日の彼は、アラブ社会主義の闘士として祖国チュニジアの政治活動にかかわっていたのですが、夢がついえた今は、ヨーロッパでも有数のアラブ関連古書店を経営しています。

チュニジア情勢が大きく動いていた二〇一一年一月、彼の店を訪問しました。店主のライフワークは、フランス国内で出版されたアラビアンナイト関連の全出版物を収集して目録を作るというもの。目録の話のあとは、チュニジアの動きに話題が移りました。

このころのフランス人中東地域研究者は、チュニジアの動きは限定的なもので近隣諸国にはあまり影響を与えないだろうという見方だったのですが、店主の意見は正反対でした。チュニジアでの動きは必ずエジプトに波及するだろうと言うのですが、はたしてそのとおりでした。

店主のライフワークはもうすぐ完成するそうです。次回は彼の故郷、チュニジアと同じマグリブ（「日の沈むところ」）にあるモロッコのフェズに飛んでみましょう。

P62〜66 中近東・北アフリカへのご旅行はP62〜66をご覧下さい。

マルドリュス版の挿絵（物語を語るシェヘラザード）

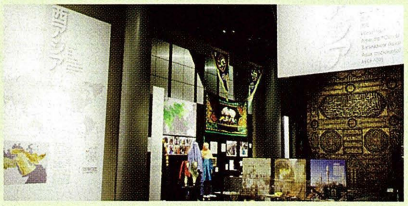
銘菓「アリババ」

西尾氏が副館長を務める

国立民族学博物館（みんぱく）

「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに、展示や情報発信を通じて、人間文化を探求への旅へご案内します。

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
TEL：06-6876-2151


リニューアルした国立民族学博物館の西アジア展示